

西洋服飾の史的事象によるジェンダー論  
Gender Studies in the Historic Phenomenon of Western Costume

伊藤 亜紀\*<sup>1+</sup>, 水野 千依\*<sup>2+</sup>, 新實 五穂\*<sup>3+</sup>  
Aki Ito\*<sup>1+</sup>, Chiyori Mizuno\*<sup>2+</sup>, and Iho Niimi\*<sup>3+</sup>

\*1 国際基督教大学教養学部 東京都三鷹市大沢 3-10-2

Faculty of Liberal Arts, International Christian University,  
3-10-2 Osawa Mitaka-shi, Tokyo, Japan

\*2 京都造形芸術大学芸術学部

Department of Art and Culture, Kyoto University of Art and Design,

\* 3 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科  
Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University.

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学  
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture  
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract : This joint research's primary objective is to consider the formation of awareness of Gender in the European costume during 14<sup>th</sup>-19<sup>th</sup> Century. We are investigating the various phenomenon's of the European clothing culture: for example, the theory of color symbolism during 15<sup>th</sup>-16<sup>th</sup> Century Italy, the representation of Italian Christian figures, and the cross-dressing in the Modern French literature.

### 研究概要

本研究は、イタリアおよびフランスにおける服飾の史的事象を通して、多様なジェンダー意識が、中世から近代にいたる歴史の中でいかに成立してきたかを考察するものである。手稿・書簡・回想録・小説・戯曲などの文献資料と、絵画・彫像・服飾、風俗版画・諷刺画などの図像資料とを用いて、実証的調査を昨年度に引き続いて継続し、より充実した研究成果を得るため、現地(イタリアおよびスイスの諸聖堂、フィレンツェ国立図書館、シエナ国立絵画館等)での資料収集・調査・分析はじめ、国内の大学図書館(小樽商科大学附属図書館)での書誌学的な調査などを実施した。また本研究テーマに関連して、中世イタリア文化史専門のボローニャ大学・ムツアレツリ教授を招聘しての講演会を企画し、次年度の秋の開催に向けて事前の準備に取り組んだ。

### 研究結果と考察

中世末からルネサンス期のイタリア、および近代フランスの服飾に纏わるさまざまな事象を通して、ジェンダー観や女らしさ・男らしさという精神性を解明したことに加え、キリスト教や世俗の世界における性の接近・同化・越境という現象に焦点を当て、その行為に付随する心性・感性を究明した。具体的には、15世紀初頭のフランス宮廷で活躍した女流詩人クリスティーヌ・ド・ピザンの事跡を論じた Maria Giuseppina Muzarelli, *Un'italiana alla corte di Francia. Christine de Pizan, intellettuale e donna*, Mulino, 2007 の邦訳を完了した[1]。この翻訳作業において、写本工房を構えていたクリスティーヌが、挿絵中の自らの肖像の多

\*1) itoa@icu.ac.jp

くを青い服を着た姿で描かせている点に着目し、この色には彼女がつねに服装に求めた「慎み深さ」のみならず、写本の献呈者に対する著者の「誠実さ」がこめられている可能性が高いことを、彼女の『三つの徳の書、あるいは女の都の宝典』や『恋人と奥方の百のバラード』などの諸作品から明らかにした。この成果は、2010年6月に開催される第2回西洋中世学会大会のシンポジウム「メディアと社会」において発表する予定である。

また中世末からルネサンス期のキリスト教聖像に観察される「性の越境／両性具有化」については、オーストリア、スロベニア、北イタリア、スイス、ボヘミア、イギリスに頻りに描かれた「主日のキリスト」という図像を中心に現地調査を行った。既存の諸図像の混成からなるこの特異な図像が、しばしばアイデンティティ不詳の女性像に変容したり、「両性具有」として表現される現象に注目し、描かれた場や他の図像との関連において調査した結果、本図像の着想源のひとつであるルッカの《聖顔》の女性版「キムメルニス」とも並置される事例が存在し、一連の図像体系のなかで本像のジェンダー・シフトの論理を考察する手がかりを得ることができた。さらに、キリスト教礼拝像の「着脱」という問題については、ルネサンスにフィレンツェで格別の崇敬を集めたインプネータの聖母に焦点を当て、奇蹟力の制御という文脈で人類学的視点から考察を重ね、その成果の一部を奉納像にまつわる論文[2]において発表した。またいずれの研究課題も、博士(論文博士)学位申請論文[3]の一部において現時点での成果を公表した。

さらに、19世紀フランスにおける実社会での異性装・異装の事例に関しては、ロマン主義の女性作家ジョルジュ・サンドによって著された作品における服飾描写の分析と実生活での彼女の男装とを比較考察し、創作活動と私生活の両面から、サンドの性別二元論に対する考えを探り、彼女にとっての「第三の性」とでも言うべき「女性以上の存在」という表象が、「男性と同等の教育を受けた女性像」であることを明らかにした[4]。また、当時の女性解放の思想や女性運動が衣服改革と連動していた点に注目し、初期社会主義思想の賛同者、とりわけサン＝シモン主義者によって推進された衣服改革の全容を解明して、それを支える精神性や社会的・文化的背景を明確にした。その際、女性サン＝シモン主義者が着用したとされるズボン型の下着を取り上げ、「ズボンをめぐる争い」をテーマにした中世から近代までの大衆的な通俗版画と照らし合わせて分析した結果、ズボンおよびズボン型の下着が持つシンボリックな意味や、夫婦間の男女平等を目指すサン＝シモン主義の女性解放思想とズボンに付随する表象世界との結びつきを理解した[5]

## 文献

1. マリア・ジュゼッピーナ・ムツァレリ:「フランス宮廷のイタリア女性—クリスティーヌ・ド・ピザン」, 知泉書館 (2010年7月刊行予定)
2. 水野千依:「ルネサンスの奉納像—(痕跡)と(分配されたパーソン)」美術フォーラム 21, 2009, pp.101-108, 醍醐書房, Vol. 20 (2009)
3. 水野千依:「ルネサンスの図像における奇蹟・幻視・分身—イメージ人類学的視座から—」(現在、京都大学大学院に論文博士申請のために提出、審査中), 中央公論美術出版 (2010年刊行予定)
4. 新實五穂:「19世紀フランスの服飾と女性性—ジョルジュ・サンドの実生活における男装と対話式小説『ガブリエル』における女主人公の異性装—」: 杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要, Vol.8 (2010年3月刊行予定)
5. 新實五穂:「異性装研究—近代フランスにおける服飾の社会表象—」: 第14期女性学連続講演会「ジェンダーを装う」, 大阪府立大学女性学研究センター (2010年3月刊行予定)